難聴児の言語指導法（脇語・キュードスピーチと用いた訓練の効果）

桜木面夫（愛知県総合保健センター）

はじめに
　近年、聴覚障害児の教育が低年齢化し、その成果もあがりつつある。当教室においても1〜2歳の児童が主な対象となってきている。そこで昭和49年末より検討を始め、50年より実施にふまれたのが現在いわゆるキュードスピーチと称して使っているものである。この方法は1965年〜1966年にかけてギャロウ大学のR. Orii, Cornetが開発した手指併用法ではなく、京都聴検学校で行っているものと参考にして開発したものである。

I. 目的及びその長所
　1. 口話教育の補助手段　ことは要らない子等には読解ができない。手指併用により視覚的通信能力を大きくし読解をやすくする。（Cued Speech）
　2. 身振り（ここでも身振り語は聴覚の成人が使いやすく、手まねではなく、親子の間で伝達しやすいもの。自然の身振り、ジェスチャーなど）はまだ話し手たる子が持たない幼児にキュードスピーチとともに示し、理解を助ける。読解をつけるための補助手段として吸収が良い、
　3. 言語いうほどと同期する。4. 口に焦点を合わせて眼による弁別度が高く、幼児にも理解しやすい。5. 視覚も発達している。8. 構音要素を急に付与する。9. 読解が正しく正確になりやすい。10. 言語能力の発達が早いうちにCUEについて
　1. CUEの構成　従来聴覚教育で発音発語指導時に用いられてきた指示法（構音要領と手指で示す一連の手法）を、音素により統一的に統一し、読解時の口型変化に加えて音頭把握を容易にしたもの。但しきん（母音部ではない）だけ是指示と採用した。
　2. 耳なりには、手を耳と口の前に立てる。さ行・甲乙上にして下あごにつける。あごの下に移せばさ行になる。さ行はなに軽く指をつける。
　3. 使い方　話し手との同期して口の側方でCUEを示す。さ行・さ行はあごこの下に移せばさ行になる。さ行・さ行はさの口を中央でつけるが読解のさまになじ観からはならない。手を（音素）を示し母音部は示さない。1. 身振り語は、手をキュードスピーチのあとで、さ行に軽くは身振り語を交わさない。工、読解できる話はキューをしない。手を進めてくれば読解できなかった時にCUEをつける。工、工、段階指導法　1. 聴話　2. 読話　3. cue にする。
　III. 将来展望　当然のことであるが、Cued Speechは自然に聴覚へと転化していく。現に2才台も読解でき、CUEを用いないでいる。

IV. 症例
　A. 王 男 S 48 6 17 生 初語 49/1 7 訓練開始 50 1 沈着力 500Hz 10dB
1000Hz 2000Hz とも 95dB 100dB 以上 HA オナコン PPX V自重 3 1000Hz 14dB 10dB SPL 51年6月現在 400語以上 2〜3語文単文を読む 20にシャーゴンナー。
　B. 王 男 S 48 9 1 生 初語 49/1 2 訓練開始 50 1 沈着力 500Hz 75dB
1000Hz 2000Hz とも 100dB HA オナコン PPX V自重 4 1000Hz 14dB 115SPL 10dB 51年8月現在 読解300語以上